

TOGETHER FOR A FAIRER WORLD



FAIR TRADE



第 27 号  
2001 年 10 月

# ネパリ・バザーロ だより



ベルダレルネーヨ通信

ネパリ・バザーロは、ネパールを中心としたアジア諸国のハンディクラフト製品や食品の企画、開発を行い、継続的に輸入を続けることによって就業の場の拡大をめざすフェアトレード団体です。立場の弱い人々、女性、子どもの自立を支援し、貧困の課題改善に取り組めたらというのが私たちの願いです。母体となるボランティア・グループ（NGO）であるベルダレルネーヨ（ネパールの女性の自立と子どもの育成支援の会）のトレード部門として 1992 年から活動しています。1998 年 2 月からは、地球市民かながわプラザに直営店「ベルダ」をオープンして第三世界からの品々をご紹介します。

## フェアトレード 活動紹介



ネパリ・バザーロは、IFAT に所属して、国際的な協力を得ながら、フェアトレード運動を通じて社会貢献を目指しています。

IFAT は、ILO（国際労働機関）の正式なオブザーバの認定を受けたフェアトレードの国際組織です。



## 特集

フェアトレードの現場とその想いシリーズ その 6 特別記事：2001 年秋冬カタログ同時掲載特集

- ① 「女性が受け継いできた伝統と情熱」 ..... p.2  
地域から発信して世界と繋がる
- ② 「絵本作りを通して」 教育とフェアトレードの接点 ..... p.6

みちのくの旅で得たもの（ネパリ活動紹介）宮沢賢治の本ネパール語訳	..... p.8
「身近にできる国際協力」を考えて 平泉ユネスコ協会 大内佳子	..... p.9
ウィメンズショップ パッチワークを訪ねて 栗田利都子	..... p.10
大事件で揺れたネパール 土屋春代	..... p.11
ヒマラヤ文庫の紹介	..... p.11
お知らせ・編集後記	..... p.12

表紙絵：「ネパールの村風景」ラジュ・ムニ・バジュラチャーリヤさん画

&lt; 2001 年秋冬号カタログ同時掲載企画 &gt;

## 女性が受け継いできた 伝統と情熱

編集部 &amp; 土屋春代

ネパール・インド国境にまたがるタライと呼ばれる平野部の東に、ジャナカプールという町があります。観光客のほとんど行かないこの小さな町に、埋もれていた宝がありました。母から娘へと、この地に住むマイティリ族の女性達に代々描き継がれてきた壁画。女性は他人に見られないよう、サリーで顔を隠しながら歩かなければならないほど保守的な社会で、女性達の受け継いできた絵を製品化し、少しでも彼女たちの収入を確保しようという試みが始まりました。

平野部の女性たちは、山岳部の女性たちよりもその立場は厳しいといわれています。その平野部のジャナカプールに今回は焦点をあて、「JAC」の生産者を訪ねて」を通じてその一面を覗いてみたいと思います。

写真や彼女たちの作品は、カタログ秋冬号でご紹介しています。お楽しみ下さい。

### 生産者を訪ねて

JAC (ジャナカプール・アート&amp;クラフト)

- 苦境を、助け合い支え合って生きる人々 -  
土屋 春代

[ 初夏の風に吹かれて ]

3月のジャナカプールは初夏の陽気だ。  
空港から力車で揺られて吹く風が心地よい。  
カトマンズが肌寒く、朝夜はセーターを着るほど  
だったので、半袖に着替えて身軽になると動き回った



**ネパール**・インド国境にまたがるタライと呼ばれる平野部の東に、ジャナカプールという町がある。観光客のほとんど行かないこの小さな町に、埋もれていた宝があった。



製作：ネバリ・バザール  
〒247-0005  
横浜市栄区桂町 274-15  
VHS 10分 無断複製禁止



生産者をたずねて  
ミティールアートの世界  
JWDC (Janakpur Women's Development Center)



¥2,000

FAIR TRADE  
生産者をたずねて  
ミティールアートの世界  
JWDC (Janakpur Women's Development Center)



製作：ネバリ・バザール

ジャナカプールの町並みやミティールアートを紹介するビデオ (1999年 ネバリ・バザール製作)

くウズウズしてくる。

バザールの真ん中にあるホテルからJACまでは歩いて数分だ。有名なジャナキマンドールやラーマ寺院を見ながらブラブラ歩く。

ラーマ・ヤナ伝説に彩られた町、寺院と池と原色の絵が目立つ。華やかで賑やかな町の中心から少しそれただけで、JACの新しく建設中の建物は池を背中に静かに佇む。

JACでは34人の女性が働き収入を得ている。17人が通いで、17人が家で仕事をしている。

[ アジツさんとJAC設立まで ]

最初にJACを知り、代表のアジツ(35才)さんを紹介された時、ミティールアートと言えば女性と思い込んでいた私は、「えっ!」と正直びっくりした顔をしたらしく「ご期待に添えなくてごめんなさい」と笑われた。

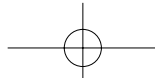
### ジャナカプールの伝説

ジャナカプールの伝説

ネパールがたくさんの小国に分かれていたころ、タライには「Maithili (マイティリ、特に絵画などの芸術をさす場合はミティールと発音)」という王国があった。ジャナクという英明な王が支配していたとき、王女のシータがラムという神様に嫁ぎ大変に栄えた。この頃からジャナカプールと呼ばれるようになったというヒンドゥー教の伝説の町である。王女を奉ったジャナキ寺の祭りには毎年全国からたくさんの参拝者が集まる。その美しいムガル様式の寺は、ネパールというより、インドを連想させる。人々の顔もよく似ている。肌の色の黒い、目の大きなアーリア系の民族の彼らは話す言葉もマイティリ語、女性のサリーの着方もカトマンズと違う。



サリーをまとい、荷物を運ぶ女性達



デザインの打合せをすると、打てば響く反応に驚く。彼からもどんどん提案が来る。お互いに相手のアイディアに刺激を受け、最初に描いていたものよりイメージがふくらみ、良いものができあがっていくのはうれしい。

今度はどんなことを考えてくるだろうか、とか、このアイディアを話したら何を言うだろうか、とか、会うのがいつも楽しみだ。

5人兄弟の下から2番目に生れたアジツさん。彼は幼い頃、父親からよく叩かれ、ダメな息子という烙印を押され苦しんだ。絵が好きで、部屋で絵を描いてばかりいる息子に「男らしくない」とがっかりし、小さいながらも日用品店を営む父親は早く商売を覚えて独立して欲しいと願った。

やがて店を与えられたが、1年で失敗し、好きな絵を習いたがる彼を、父親はとうとう勘当した。

親から自分を否定され、家も追い出され絶望したという。しかし、やがてそんな中からも彼は少しずつ自分の道を見つけ始めた。

やはり好きな絵の道に進もうと思った彼は、ネパールで有名なタンカ（仏教画）を習うチャンスがあり、喜んでカトマンズへ行った。しかし、師は「おまえの絵は他にある。ジャナカプールの人間はミティーラアートを大切にしろ」と諭したという。

自らの役割を自覚した彼は村々を回り外壁に描かれている絵をスケッチし始めた。昔は夫に大事にされるようにと殆どの女性たちが刺青をしていたが、今では刺青をする女性たちもずいぶん減ってきた。そのデザインをひとつでも多く記録しようとノートに埋めた。

ミティーラアートに精通するようになったアジツさんは希望者に教え、それで何とか自力で生活できる目途もたった。勘当された父親にも許され、両親のすすめるリナさんと結婚し、息子ひとり、娘ひとりも授かり、順調な生活を送るようになった。

しかし、村を回り絵の研究をする間に、女性たちの厳しく辛い生活を知ったアジツさんは、自分だけの幸



ジャナカプールの村にて；少女の頭上に見えるのがアジツさん

〔シルワスタさん 〕

せに満足せず、彼女たちの収入に結び付けることのできる仕事を始める決心をした。

ミティーラアートを商品化し女性達の収入に結び付けるNGOとしてすでに有名になっていたJWDC (Janakpur Women's Development Center) で何年か仕事をしたことのあるビーナさんとも出会い、彼女の経験に助けられ1994年、JACを設立した。

2000年のクリスマス用にフェルトで象のオーナメントを作った。かわいいその飾りは好評で大量の追加注文をすることになった。しかしその時、ビーナさんは子宮筋腫の手術を受けた直後で仕事ができない。

アジツさんは入って1年目の、生活の厳しさから優先的に仕事を回したいと思っていたシルワスタさんにこの仕事を回せたらと思い、術後のビーナさんを訪ねて相談した。

「ネパリ・バザールから注文がきて作らねばならない。あなたのデザインだが他の人に作らせても良いだろうか？ 皆大変な暮らしをしているが、中でもとっても厳しい生活の人がいる。その人にこの仕事をあげても良いですか？」と。

ビーナさんはどんなに厳しい状況でもいつも笑顔を絶やさず、明るく強い女性だとアジツさんは言う。その時、ビーナさんは「その人の暮らしが少しでも良くなるといいですね。」と答えてくれた。

アジツさんに案内されてシルワスタさんを訪ねた。バザールから歩いて15分くらいの住宅地。決して裕福

### ミティーラアート

タライの東、ジャナカプール。この町の女性たちに代々受け継がれてきた原始芸術「ミティーラアート」。家の内壁や外壁には、様々の絵が描かれている。楽しそうな絵から深刻なものまである。その絵を通して、生活の様子が伺えるもの、女性の微妙な心理の動きが伝わってくるものまである。その絵の独特の画風に魅了される。



手すきの紙に丁寧に彩色される

描き方：  
下書きの後、陰影をつけず、鮮やかに彩色し、単純な線で伸びやかにアウトラインを引く。



とは言えないまでも庶民の住む家々が立ち並ぶ中に、柱にムシロを掛けただけのような場所がある。それがシルワスタさん一家の住む所だと言う。18才と16才の娘と10才前後の息子ふたりがいる。夫は精神を病み仕事ができない。イライラし暴力をふるい家族を追出した。母子は1年ほど外で暮らしたが、シルワスタさんは、何とか家族と一緒に住めるようにしたいと、JACに仕事を求めて来た。

3ヶ月の技術トレーニングを受け、仕事を貰えるようになった時、象のオーナメントの仕事を貰えて、とてもうれしかったと言う。



クリスマス・オーナメント

年頃の娘の居る家なのに壁がなく、寝台の回りを辛うじてムシロが壁代わりに覆っているが、着替えるのにも問題がある。アジツさんも心配して、壁だけは早急に工事したいと話す。かまども雨風の時は使えず、乾かした米などを食べて凌ぐ。

18才の長女はSLC（全国一斉の卒業検定試験）の結果を待っている。「受かっているといいね」と言いながら、受かっても仕事につくことはできない厳しい現実には立ち竦む。

たじろぐ私に、写真を撮ることも、彼女たちの生活を発表することも、却って積極的に同意してくれた。何故？

嫌ならば無理をしないで、写真がなくても、あなたがたの生活を伝えなくても、製品は頑張って売から大丈夫だから、と言うと、シルワスタさんは「私たちのような人が少しでも減るように。役に立てたらうれしい」と微笑んだ。

[ モニカさん ]

下を向いて彩色に余念のないモニカさんが、私を見て「また来てくれたんですね」と笑顔で話しかけてくれた。新しいサリーを着ているのね、きれいですねと言うと、笑って周囲を指さす。

あらあら同じサリー！ そう、JACではデザイン（10月にあるネパール最大の祭り）の時、皆に新しいサリーを配るそうだ。それをJACで働く時に着る人もいれば、別の場所を着る人もいる。ここで働く人たちの生活は厳しく自分のサリーを買うことは滅多にないだろう。収入を得ても自分のことは後回し。それを知るアジツさんの心遣いだろう。

昨年、モニカさんのお宅に伺った時、50代ぐらいに見える女性が食事の支度をしていた。

お手伝いの人？ と首をひねっていたら、アジツさんが、「1人目の奥さん、お子さんがいなくてね、モニカさん（2番目の妻）が働いているのでその子どもたちの面倒を見ているんです」と説明してくれた。私たちに何か訴えかけるように見つめるその人の目から涙が伝い流れた。声を立てずに静かに泣くその人に、何の言葉も掛けられなかった。

2人の妻を置いて数年前に夫は亡くなった。モニカさんは食べるためにJACで絵を習い、働き、もうひとりの妻はその留守を守る。

その時、赤ちゃんを連れて嫁ぎ先から来ていた長女は14才だった。その下の妹が今年結婚することになった、とアジツさんが言った時、思わず「あの子の妹！ まだほんの子どもじゃない！」と叫んだ。

「他にどうい道がある？ 食べさせる子どもが減ってモニカさんは楽になるよ」

アジツさんはボソッと云った。

[ 継続すること ]

ネパリ・パザーロでよく売れているJACの商品に写真立つきの小さな鏡、ミニミラーがある。その絵を描いているのがミラさん。

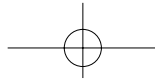
## 地域

## ミティールアートの地域

ジャナカプールは、インド国境に近い平野部にあり、ネパールの首都カトマンズから東側、紅茶で有名なイラム、パンチタール地域の下にあるピラトナガルとの間に位置する。

ネパールは小さい国だが、約36と言われる民族が暮らし、それぞれ違う文化を持ち、まるで異国に来たような雰囲気を漂わせていて、とても新鮮に映る。ジャナカプールの人々は、その民族の一つ、マイティリ族で、言葉は、マイティリ語。東ネパールの平野部に住む人々で、ネパール語について多く話されている言葉（12%:1961年国勢調査 by People of Nepal）でもある。





2年くらい前に夫の兄が亡くなった時、ネパールの法律では、死後数週間内に借金を完済しなければ、抵当は取り上げられることになっていて、兄が土地を担保に借りていたお金を返さなければならず困っていた時、アジツさんはミニミラー製作の前金としてお金を渡し、彼女は借金を返すことができ、その後も仕事があり、順調に行っているという。夫は教師をしながら、妻の仕事の手伝いもよくし、同居する夫の母親も、嫁がよく働くとはめているという。

アジツさんに「ネパリからミニミラーの継続注文がくるから、先にお金を渡せた」と言われ、もし注文できなかったらどうなったのだらうと思い、ヒヤッとした。

[ すれ違い ]

海外に出たことのないアジツさんは、外のマーケットのことをあれこれ想像はするが、実態がわからない。特に日本のことは、多くのネパールの人がそうであるように、強い経済力、大きなマーケットとして、過大に評価している。

「日本では物が溢れ、中国やインドなどから安いものが大量に入って、簡単には売れない」と現状を説明しても理解は難しいようだ。

村を訪ねる間中、力車に並んで座りながら、お互いに理解してほしいと、熱の入った議論が続く。

「日本人はね、20年ぐらいな～んにも買わなくても生活できるほど、いっぱい物を持っているんだって！ どんなにあるかって、雑誌に写真が出て…アレッ アジツさん！ ねえ！ それでねえ、聞いてよ！」

急に力車を止めて、外に飛び出したアジツさん、1軒の家の外壁を指差して、  
「はるよさ～ん、ねえ、この絵イイでしょう！ 見て！ 見て！」



ミティーラ ミニミラー



ミラー製作風景  
工房に集まり、みんなで作業したり家庭で作ったり、働き方は各々の女性の状況により様々。

## JAC

1994年設立されたJACはジャナカプールに伝わるミティーラアート製品を手がける工房です。地元の女性たち34人が仕事をしています。彼女たちの多くは、マイティリ族の中でもカーストが低く差別を受けたり、夫に捨てられたり、死別したり、大家族なのに収入がなかったりと、社会的にも経済的にも苦しい立場の女性たちです。JACではそうした収入が必要な働きたい女性たちに絵のトレーニングから始め、縫製やカットティングなど得意な分野で力を発揮できるように気を配っています。また、家庭の事情で家を離れられない人は、自宅で仕事をしています。代表のアジツさんは女性のものとされるミティーラアートを自ら学び、多くの女性たちに教え、商品開発から販路開拓までこなす傍ら、JACの女性たちがそれぞれ抱える問題を全て把握し、必要なサポートをしています。

### JWDC (Janakpur Women's Development Center)

ジャナカプールの女性たちの受け継いできたアートを商品化し、少しでも彼女らの収入を確保しようと1989年JWDCが設立された。空港からも近く、広い敷地にジャナカプールの伝統的な家々がセクションごとにわかれて並び、真中にチョウタリ（菩提樹等の大きな木の下にある休憩スペース）もあり、明るく健康的だ。アメリカ、カナダ、日本等外国からの援助も多く、入りたい女性たちがたくさん待っている。以前募集した時も数倍の応募があり、面接で15人に絞った。今ではメンバー80人が絵を描いたり、Tシャツやクロスにプリントしたり、茶碗やカップなどの焼き物を作ったりと働いている。 <詳細：通信18号参照>



JWDC 外観



## レブチャの絵本作りを通して

----- 教育とフェアトレードの接点 -----

(編集部: 早苗)

東ネパールのイラム地域に住むレブチャという民族に伝わる民話を絵本にした「大空へのみち」が完成しました。ネパール人女性、サパナさんが、レブチャの家庭に滞在し聞き取った民話です。1年半ほど前に始めた「レブチャ・プロジェクト」により絵本発行というひとつ目の果実が実りました。

## サパナさんとの偶然の出会い

現地で働く女性たちの多くは英語が話せません。彼女達と交流を深めるには、ネパール語を話さなければなりません。そこで、現地に滞在する度に、ホテルでプライベートレッスンを受けようと、代表の土屋春代は女性のネパール語の先生をけんめいに探しました。その結果お会いした先生がサパナさんでした。(詳細は通信 25 号参照)

教育は大切、でも何もできない！  
(フェアトレードとの出会いから共同作業へ)

教育を専門とするサパナさんが卒論研究の時に訪れたのが、レブチャの民族が暮らす村でした。レブチャの子ども達は、学力が低いので、その原因を探り、改善をしたかったのです。でも、結果は、経済的要因が大変大きな部分を占めていて、その解決なくして改善は考えられない状況でした。なににもできない、でも一時的なお金をあげる行為は絶対にまずいと思っていました。何もできない自分に唯一できること、それは、この状況を心ある人々に伝えることでした。

お互いに自分のしていることを話し合う内に、フェ



レブチャの人々に関する資料や発行された雑誌  
お隣のインド、ダージリン地方にもレブチャの人々  
が暮らす。インド政府が援助しているので、暮らし  
も良く、ここに挙げたような出版活動もある。



初めて開いた絵本(レブチャ)の会合から。  
左端がサパナさん。中央が代表の土屋

アートレードという活動を知り、これなら、その村の厳しい生活をする人々の改善に力を貸すことができるかもしれないとサパナさんは確信しました。そして、フェアトレードを目指す私たちと教育を専門とする彼女との共同作業が始まったのです。

イラムのフィッカル地域におけるレブチャの教育状況についての考察(サパナさんの卒論から)

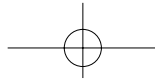
イラムはネパールの中でも発展した地域です。気候がよく水も豊富で、道路も整備され、インドやイギリスの文化的影響にも恵まれ、教育も行き届いています。

紅茶を始め様々な換金作物も収穫されています。そんな中で、レブチャのほとんどの家族は、貧しい暮らしをしています。日々の生活費のために土地を売り払い、条件の悪いやせた土地へ移住してしまいました。急斜面の畑では1年分の食料は収穫できず、換金作物を作り始める余裕もありません。学力が低く、世慣れないレブチャは給与仕事にも就けず貧困から抜け出せずにいます。教育意識の高い地域なので、レブチャの親も教育の重要性は知っていて、ほとんどの子どもがいったんは学校に入ります。でも、大方が途中で辞めてしまいます。

それは何故か、就学率の低さが改善されない原因を探りました。家から学校までの距離は近く、雨季でも道は良く、退学理由にはなりません。

中途退学の理由は、

- ・各家庭の収入が少ない(学費は無料だが、貧しいレブチャの家庭は教科書代や制服代を払えない。店に並ぶ商品を買えないことで、クラスメイトに対し劣等感を持つ。)
- ・子どもの家事労働(畑仕事や家畜の世話を求められ、家で勉強できない。勉強不足で落ちこぼれる)
- ・学歴のない親の影響(親は、勉強の手伝いやアドバイスができない。入学さえさせれば学校に無関心。教師を恐れ相談もできない)
- ・ネパール全体の経済状況の厳しさ(大卒の失業者の



増加が親の教育への価値観を低め、子どもを学業怠慢にする)

などが主なものでした。

親の経済状況が、子どもの就学に大きく影響していることが分かります。たとえ子どもが優秀でも、親が教育の必要性を強く感じていても、経済基盤が弱いと些細なことで状況がどんどん悪化し、教育の機会を奪い、人としてのプライドも壊してしまいます。

#### <ラム君の事例>

小学3年生のラム君はクラスで1番の賢い生徒。両親と二人の子どもという家庭。父親は珍しく8年生まで学校に通った。母親は、女性開発事務所の融資を受けて牛を飼い、ミルクを売り始めた。4人家族には十分な収入で、暮らしも良くなり始めていた。

ラム君が6年生の時、母親が病気になった。家族は治療費のため持ち物売り、借金もしたが、治療の甲斐なく母親は死に、山のような借金が残った。ラム君は、その時学校を辞めた。

まもなく父親は再婚し、今は子どもが6人になり、最年長のラム君は、たった13歳で家族のために働かなければならなかった。

家族には、15,000ルピー(約25,000円)の借金がある。財産は灌漑設備のない急斜面の畑と1頭の牛。畑からは家族の3ヶ月分の食料しか採れない。生活費を稼げる大人は父親だけ。子どもの世話に追われる母親は、家でもできる編物の技術を持つが、材料を買うお金が工面できずせっかくの技術を生かせない。

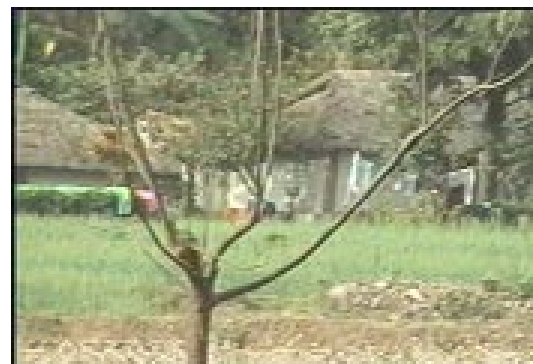
ラム君は借金を返すために、金貸しのところで働き、時にはアムリソ(簾を作る草)やかいばを売っている。朝6時に起きて、かいばを集める。10時頃朝食をとり、畑で父親を手伝い、村に賃金労働があればそれをするが、大人並に働けないので賃金は半分。6時頃家に帰り、学校から帰宅した友達と遊び、9時頃ベッドに入る。

ラム君の弟の一人は、彼のように賢かったが、ラム君と共に学校を辞めた。もう一人は、まだ村の学校で勉強している。学校は無料だが、寄付金と試験料、制服、本、文房具など、少なくとも年間1,400ルピー(約2,400円)が必要。成績の良い彼は学校の計らいで、寄付金も試験料も免除され、本は友達と共有し、教師は書き取りのために紙と鉛筆を与えた。それで彼は何とか学校に通っていた。

ある時、息子のサンダルが壊れ、裸足では学校に行かないと泣く彼に父親は新しいサンダルを買ってやれなかった。教育を受けていた両親は教育の重要性は十分感じていたが、裸足で友達といることがどんなに恥ずかしいかも分かるので、無理に学校へ行かせることができなかった。彼は学校を辞める以外に、どんな方法があったのだろうか？



イラムバザール周辺の村の生活模様



イラムの中心から隣の街までの間にある家々

#### 絵本づくりを通して

サパナさんは、調査研究するだけの学者にはなりたくない、協力してくれた人たちの状況改善に結びつく実践をしなければ、と強く感じています。聞き取った民話を絵本にすることは、貧しい少数民族の子ども達に誇りを持ってもらうきっかけにもなるし、子ども向けの絵本の少ないネパールのためにもなると考えました。更に、良書が1冊でも増えることは、識字教育を終えた人々が読む適切な本が少ない現状では素晴らしいことです。

私たちは、レプチャに伝わる民話をこれから少しずつ絵本にしていく予定です。絵本作りによってレプチャの味わい深い文化をネパールや日本に紹介するだけではなく、活動を通じた地域研究により、経済的に不利なレプチャの人たちの状況をより深く知り、フェアトレードを通して彼らの生活向上へつなげていこうと考えています。

#### サパナさん来日

10月から11月にかけて、サパナさんを日本にお招きします。東北、関東、九州と、日本各地を訪れ、様々な活動をしている方たちや学校関係者の方々と共に、ネパールの現状、教育の重要性、私たちがすべきこと、フェアトレードの役割...たくさんの思いを語り合い、サパナさんと私たちの今後の活動に生かしていきたいと思っています。そして、国際理解教育への一助、女性の自立という面でも豊かな社会への創造という面でも前進があることを願っています。



## 活動紹介

「中尊寺大長寿院」と「おいものせなか」を訪ねて(学習研修会の活動から)

(編集部: 万知子)

### みちのくの旅で得たもの

ネバリ・バザー口の活動を、内部のスタッフやボランティアがより深く知る機会として、夏冬のネパール研修ツアーと、国内の研修ツアーをしています。

今回はみちのく岩手の研修旅行にでかけました。お店を運営する、「風's」(名古屋)の土井幸子さん、「ちえのわハウス」(小田原)の和田美恵子さんも加わり、総勢10名の旅となりました。

#### 中尊寺の「ネバリ・バザー口の会」

6月24日、MAXやまびこは、10時41分に「一の関」に到着。急ぎ、目的の中尊寺最古のお寺である大長寿院へと向かいました。

大長寿院の石段を上ったところで目に入ったのが、門の脇にある「ネバリ・バザー口の会」の看板！

住職の奥様である菅原美智子さんが、御釈迦様の生まれたネパールのために何かしたいということで、ネバリ・バザー口のフェアトレードの主旨に賛同し、観光や参詣に訪れる人達に、ネバリの商品を紹介、販売しています。出迎えてくれた菅原さんは藍染めの服がよくお似合いの笑顔のすてきな方でした。

品物は、本堂右脇の畳のお部屋に展示され、商品がとても美しく、見易くディスプレイされていて、皆ビックリ。障子を通った光が、馴染みの品物達を一層温かみのあるものに映し出していました。ネバリの商品が日本のお寺にじっくり溶けこんでいるのが、不思議なような、でも同じアジアのものだから自然なのかも…。

#### 中尊寺とネパールの関係

菅原さんにとって「バザー」を始めるきっかけとなる出会いがありました。青年海外協力隊員でネパールに赴任されていたお嬢様を訪ねられた時、コットンクラフトのサラダさんバッグを記念に買われたのです。そしておとしの秋、たまたま花巻でのネバリのイベントに参加され、春代さんと、バッグの生みの親であるサラダさんに出会い、強い動機付けとなりました。

ネパールの女性が自立の為に心をこめて品物を作っていることを、たくさんの人達に知らせたい、生活が少しでも良くなって欲しいと、この協力を始められたのです。

中尊寺とネパールの関係を解くキーワードは、お釈迦様とサラダさんバッグだったのですね！

#### 花巻のフェアトレードのお店「おいものせなか」

次の訪問先は、岩手県花巻市にある「おいものせなか」。北上川の流れ、緑の田んぼ、金色の麦畑に目を奪



展示がされた大長寿院本堂入り口の様子  
両端に、国際協力のメッセージが見える。

われながら、市街に入り、お店に到着。初めてなのになんとか懐かしい。

お店の周りに土、石ころがあるからなのでしょう。入り口の前に植えられた草花も、野の花が自然に...という雰囲気。明るい笑顔で出迎えてくださったのは新田文子さんと子ども達。(通信23号にプロフィールあり。)気持ちの良い音楽に包まれ、木の温もりいっぱいの店内は、不思議に魅力的な空間でした。

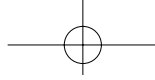
これが噂の「おいものせなか」なのか!エコロジー&フェアトレードショップというこのお店には、環境とからだに良い、石鹸などのエコグッズや再生紙、豆腐、乳製品などの生の食品やいろんな種類の自然食品が。もちろんネバリを始めフェアトレードの商品もありました。感激したのは、一般の本屋さんにないような、エコロジー、からだ、ジェンダー、子育てに関する本が棚いっぱいあったこと。そして小さな椅子とテーブルのある、陽光が溢れるコーナーにも、子ども向きの本も含む図書が並んでいました。新田さん自身、中学生を頭に4人の子どもさんのママ。ここで子どもを遊ばせながら、子育てや、環境や、いろいろなことを、地元のママさん達と語り合い、様々の活動の拠点としていのです。そしてたくさんの人が、新田さんから元気をもらっていることでしょう。生活へのこだわり、主張を自分達の生活の中で実践していく、それも自然体で...なんて素晴らしい！

次ページへ続く



徹夜?でのフェアトレード談議に燃えた参加者





## 活動紹介

「身近にできる国際協力」を考えて

平泉ユネスコ協会 大内佳子

### フェアトレード展を開いて

岩手県の県南に位置する中尊寺（藤原文化）で有名な平泉町に平泉ユネスコ協会があります。中尊寺の菅原さんとのご縁から、今年の2月に研修会でフェアトレードのお話をさせて頂きました。そして、6月、平泉町内の銀行の一室でフェアトレード展が開かれました。

忙しい中、菅原さんと一緒に動いて下さった大内さんに感想を御願いしました。（編集部）

「ネパールの女性を支援する活動をしているのですが。」と菅原さんが口火を切って下さったのは今年の始め、私共「平泉ユネスコ協会」が今後の活動をどう有意義に展開していくか考えている時でした。その話に私達は当を得たりと飛び付き、さっそく翌月には代表の土屋さんに講演に来て頂く運びとなりました。

講演はビデオを使い大変分かり易く、このような形の国際協力もあるのかと認識を新たに致しました。

年度が改まり今年の活動の1つに「ネパリー・バザール展」を開催することを盛り込みました。菅原さんはご自宅でも土・日に観光客を対象に開かれているので、色々と教わり、どのような品物が、来て下さる方々に喜んで頂けるかと2人で話し合いながらカタログをめくって行きました。

前日の陳列の準備では、菅原さんがテーブルクロスなど小物を用意して下さいだったので、ネパールの雰囲気の出た素敵な会場となりました。

初めての試みでドキドキハラハラのオープンでしたが、会員の方が友人・知人に声掛けをしたり、展示や会計の当番をして下さったお陰と、地元信用金庫内の展示場スペースをお借りできたこともあり2日間で約200人の入場と、それに見合う売り上げと大成功に終わりました。

今回の事を通して皆様の協力と暖かさを強く感じました。と同時に支援しているのではなく、私達がネ



研修会にて。右から2番目が南館会長、左から2番目が菅原さん、その右隣が大内さん



展示販売会場にて。左から2番目が菅原さん、右端が大内さん。

パールの方々に教えられているのではない、途上国の人々は貧困と制度による限られた中で、何とひたむきに生きていられる事か、日本人が物や利便性ばかり追い求め忘れていた本質的な事を思い起こさせてくれているのではないかと思います。

貧困はすべての元凶であり、人生において教育は欠かせません。一人でも多くの方が「学び」の中から視野を広げられるように、微力ながら地道に活動を続けていきたいと心に留めたのでした。

前ページから続く  
宮沢賢治記念館でネパールとの出会い

その夜は、新田さんご家族と、花巻の山間の大沢温泉に。私達の泊まった自炊部というところは、今も地元の人達が湯治に利用する、鄙びた趣のあるところだ。

夕食は、新田さんが二晩がかりで下ごしらえしてくれたもの。新田さんの号令のもと、私達が焼く、煮る、和える、盛り付ける...と、大変な騒ぎの末、数え切れないほどの素晴らしいご馳走が並びました。そして夜が更けるまで話は尽きず....。

翌朝、ゆっくりと親睦と思っていたのですが、宮沢賢治記念館へ。途中、さき織りの里を訪ねながら。

ここで、なんとネパール語の本を発見！ 詩人の佐々木幹郎さんとネパール人で国会議員も勤めたこと

のあるアディアカリさん、そして彼らの友人、宮司、彫刻家、画廊のオーナー、学者、医者、詩人7人と「ヒマラヤ文庫」という名で日本文学を翻訳したものだったのです。

それは、「銀河鉄道の夜」でも、ネパールには鉄道がありません。さ～て、どんな題名にしたのだろう、と興味津々。ネパール語では、「銀河への旅」(直訳で、空のカンジス川への旅)と訳されていました。うまい訳ですね。詳細は、また後日紹介。



ネパールを通じた不思議な縁を感じた旅でもありました。

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の  
翻訳本  
監修：寺田鎮子  
(元日本ネパール協会理事)



NEPALI BAZAR

お店訪問

## ウィメンズショップ パッチワークを訪ねて

栗田利都子



パッチワーク スタッフの皆さん（右端が長谷川さん）

訪問のきっかけ

普段、生産者の方々やネパールの事情については学習会で勉強しているけど、その生産者が作った商品を買ってくださっているお店は、どんな思いでやっているのだろう？フェアトレードの日本側最先端まで知りたいね・・・みんなでお店を訪問して、お話を伺ってみよう！！そして五月晴れの気持ちのいい日曜日、ボランティアの方と共に「パッチワーク」というお店をたずねました。

青山の瀟洒な場所

東京、青山。渋谷から表参道につながる、おしゃれな店や国連大学などが連なる通りに、東京ウィメンズプラザの立派な建物があります。「パッチワーク」はこの東京ウィメンズプラザの中の1階にありました。建物の中の、「売店」という案内にしたがって歩いてくと、休憩所の一角に、売店スペースにとろせましと商品を置いている店が・・・「パッチワーク」です。

お店の広さは6～8畳くらいでしょうか。世界のフェアトレード商品、エコロジー雑貨、オーガニック食品、それに女性問題や環境、フェアトレードに関する本などが、休憩スペースまであふれています。ちょっとした調理スペースもあり、お客様はケーキや飲み物を買って、休憩所のテーブルといすでくつろぐことができます。休憩所の壁には、フェアトレードフェアに合わせて私達が貸し出していたミティエラの絵が飾られていて、訪れた人達の目を楽しませていました。

始めた経緯

私たちも、おいしいケーキとお茶をごちそうになりながらお店の雰囲気を楽しんでいると、お店のオーナーの一人であらっしゃる長谷川輝美さんがみえました。一見、華奢に見える長谷川さん、話してみると、落ち着いた、柔らかなものごしの中にも、強いエネルギーとしんの強

さを感じさせる方でした。

長谷川さんは、東京ウィメンズプラザで行われた社会参画講座で起業について学び、このことがきっかけで、「パッチワーク」を始めたそうです。その講座で、将来エコロジーショップをやりたい、と発表したら、偶然にもパッチワークさんの前にあった売店が閉店するところで、次の運営者を募集しているとのこと。そこで友人の荻村さんと共に出資者を募り、「プロジェクト・パッチワーク」というグループを立ち上げ、その3ヶ月後に開店しました。

最初は、女性問題やエコロジー関係を中心に考えられましたが、荻村さんのパートナーの関係で、「第3世界ショップ」のコーヒーと出会い、少しずつトレード商品も扱うようになったのです。

お店の立地条件

「パッチワーク」は東京ウィメンズプラザのなかにあるため、外からは店の存在がわかりません。そのため、店に立ち寄るのはプラザに来た人だけで、道を歩いていた人がブラッと入ることはなかなかないそうです。しかし、プラザで全国規模の研修などがあった場合などは、地方の方々がフェアトレードを知るきっかけにもなっているようで、リピーターではないが全国から来る、それが「パッチワーク」の弱みでもあり強みでもあるとのことでした。

“女性”に視点をのいたフェアトレード

「フェアトレードとは、生産者を尊重した公正な貿易。「フェア」の中身を自分の言葉で話せるようになりたい。自分にとっては女性の立場からのフェアトレードが中心ですね」と語る長谷川さん。1995年に北京で開かれた女性会議に出席された時には、アジアやアフリカの国の女性パワーに圧倒されたこともあったそうですが、それを逆に自分の「やる気」に変えていったそうです。自分の夢を、情熱をもって語る姿は本当に素敵。でも、これは強い意志なくしてはできないことで、頭が下がる思いです。

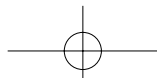
長谷川さんたちは、全国に女性の可能性を提示する場としての素敵なお店を持たれた、と感じました。またこのお店に来て、ゆっくりとお話を伺いたいな・・・と思いつつ、私自身、「パッチワーク」で元気をもらい、「やるぞっ」というパワーをつけて店をあとにしました。



その翌日、別のメンバーたちが訪問した「サイマーケット」(板橋区)

NEWS





NEPALI BAZARO

NEWS



## 大事件で揺れたネパール

— その時生産者たちは —

土屋 春代

1990年民主化を受入れ、民衆に最も親しまれたとされるビレンドラ国王とその一家が殺害されたニュースは、まだ記憶に新しい、衝撃的な大事件でした。

私達も驚き、動揺しました。その時、市民、生産者の人達はどうだったのでしょうか。たまたま滞在中であった代表の土屋より、そのひたむきな姿をレポートしてもらいました。

### 突然の電話

6月2日の未明にカトマンズのホテルの一室で、サナ・ハスタカラのマネージャー、ロヒニさんの電話で起こされました。

「私たちの国の王様、王妃が亡くなった。銃で撃たれた」と彼女は取り乱した声で告げるのですが、事態がなかなか呑込めません。「何故？いつ？どこで？」矢継ぎ早の私の質問に「詳しいことはまだ分かりません。直ぐにCNNかBBCをつけてください。ネパールテレビは何もやっていません。私も友人からの電話で知りました。今日は何が起こるか分からないから絶対に外に出ないでください。」

この国はどうなってしまうのかという不安から、最後は今にも泣き出しそうに震える声でした。混乱は数日間続き、多くの死傷者、逮捕者が出ました。

### ストライキ、そして外出禁止令

今回の出張はカトマンズに来た翌日からの3日間のストライキで仕事ができず、やっと2日間動けて、これからと思ったところへこの大事件が起きました。

誰にも想像することなどできなかった国王一家殺害という衝撃に、人々は打ちのめされ、将来への大きな不安に押し潰されそうに見えました。そして2転、3転する情報に振り回され、疲れ果てていきました。

外に出られない私に、毎日たくさんの生産者たち、友人たちから案じて電話が掛かり、私からも電話を掛けて様子を聞きました。事件直後は元気のなかった彼等も、仕事をしなければ、と自らを励まし、仕事場を再開でき次第続行するからね、と意欲を見せ始めました。

外出禁止令が解けると私も外へ飛び出し、次々に生産者を回りました。いつ禁止令がでるか分からない状況下でゆっくり滞在はできませんが、お互いに元気で会えたことに大きな喜びと通い合う心を感じ「負けるものか！どんな状況でも頑張っているいい仕事をしようね。この国の将来を良くしようね」と誓い合いました。

### 生産者から伝わる想い

この時頼んだサンプルの仕上りはどの生産者も素晴らしく、あの厳しい状況下で、よくこれだけの仕事ができたと感動します。そして彼等の強い想いを託されたのだと気付き、必死で生きる彼等に、人間の尊厳とは何かを教えられたような気がします。

## ヒマラヤ文庫図書

「ヒマラヤ文庫」は、出版社でも組織でもない。日本とネパールを文学を通じて結ぶ友好の架け橋。

佐々木幹郎さんを中心に、ネパールのアディカリ氏と彼らの友人7人が日本の文学を翻訳してネパールのカトマンズで印刷する。

これらの本のほとんどは、ネパールの大学や高校、中学校などの図書館に無料で寄贈される仕組み。この「ヒマラヤ文庫」を読んだ子ども達が将来どう育って行くだらう。そのような想いを持って作業されている。

ネパリー・バザー口でも、地域研究をして社会に貢献する道を探ること、そして子ども達への絵本提供も考えて絵本作りを始めたが、こちらは、その本作りでは先駆者。

ネパールと日本を結ぶ架け橋が、ここにもあった！



佐々木幹郎さんの「カトマンズ デイ ドリーム」巻末に「ヒマラヤ文庫」がつくられた経緯も書かれている。

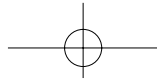


翻訳された本  
(本誌 P9 下の記事も参照)



NEPALI BAZARO





## フェアトレードのお店

## ベルダは楽しいイベントが満載です!!

ベルダでは、国際協力やフェアトレードについて共に考えていくために、また、協力の対象となっている国々の文化的すばらしさをご紹介しますために、様々なイベントを行なっています。

### セミナー「サバナさんを囲んで」 絵本作りと地域貢献

### 「教育とフェアトレード」

ネパール音楽演奏：パンチャ・ラマ

10月14日(日) 13:00-18:00

場所：あ～すぶらざ

共催：地球市民かながわプラザ

協力：ふれんどしっぷA S I A (新貿易ゲーム)

ナマステの会 (ミニギャラリー)

後援：IFAT (国際フェアトレード連盟)、Shared Interest (UK)、(財)神奈川県国際交流協会、横浜市、(財)横浜市国際交流協会、ネパール大使館、(社)日本ネパール協会

10月13日厚木・パオバブ主催

20日平泉ユネスコ協会主催

21日花巻・おいものせなか主催

22日盛岡ユネスコ協会主催

26日相模大野(高校で交流)

27日小田原・KHM主催

ちえのわハウス協力



11月2日長崎大学

3日佐世保・パオ主催

5日大分・ファークイース

トホライズン交流会

至大船 至横浜

本郷台駅

地球市民かながわ

プラザ2F

フェアトレードの

お店 ベルダ

TEL:045-890-1447

FAX:045-890-1448



卸も全国的にしています！  
お問合せ下さい。

### 「フェアトレード学習会 / ミーティング等のご案内」

「ベルダ」では、楽しい勉強会を連続で行ない気軽に参加出来るものを予定しています。みなさまの参加をお待ちしています！

10月6-7日 国際協力フェスティバル(日比谷公園)

10月28日 ヘナ講習会(兼文化紹介)

11月10-11日 横浜国際協力まつり

11月24日 ゆめ観音(大船)

次回の「料理教室」は

12月(日程未定)です。

場所：あ～すぶらざ

## 国際理解にお役立て下さい。通信販売カタログ



ネパリ・バザールでは、ニュースレターの発行、フェアトレード関連の本の出版、市民の方々の国際交流、支援の理解を深める活動も行っています。また、フェアトレードの活動に広くご協力頂けるように、通信販売カタログを作成していますので、ご興味がある方はご請求下さい。また、確実に資料が欲しい方、内部勉強会の活動を知りたい方は、購読会員(切手相当の費用として、1,050円)の制度もあります。学校、教育機関へのフェアトレード商品の貸し出し、講演会、お話し会など、開発教育のご協力も実施しています。お問合せ下さい。



### ボランティア募集！

イベントのボランティアをはじめ、地域研究と絵本を作る分科会、織と染めの分科会、インターネット分科会など、様々なボランティアを募集しています。お気軽にお問い合わせください。

ネパリ・バザールのホームページ・・・

グループの設立からフェアトレードに関する情報紹介など分かり易く読めます。

ご覧になってご意見をメールでどうぞ！

<http://www.yk.rim.or.jp/ngo/>

### <編集後記>



旅先での出会い・発見に意外性はずきものですが、宮澤賢治記念館でのネパール語の本に出会ったことは、素晴らしいですね。広い世界にはまだ知らないことや思いがけないことが沢山あるようです、楽しみだなあ。(昌治)



7月のネパール料理教室も大好評でした。食べ物をつくしむ大切さや、素材本来の味の魅力に気付いたと感想を話す素敵な参加者の皆様。運営する私達もとても豊かな気持ちになれます。文化交流の架け橋は胃袋から？ 楽しいひとときを過ごすために、次回12月の企画頑張ります!!(早苗)



みちのくツアーで、お会いした方々の情熱に触れ、元気をもらいました。これからも、いろいろな方々にお会いしたい・・・たくさんのものをいただくばかりの私ですが・・・。(万知子)



8月、世間は夏休みとか。決算、カタログと通信の編集校正が重なり連日徹夜続きでフラフラ。これらが終わるとネパールへ。帰国したら10月のセミナー。好きなスポーツもできず、友人、親戚にも会えず。知力、体力、健康とどれもが減退。でも、何か大切なものがみえてきそう。やる気は健在です!(完二)

発行：ネパリ・バザール/ベルダレルネーヨ

247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町 274-15

第2中山ビル 3階

Tel:045(891)9939 Fax:045(893)8254

<http://www.yk.rim.or.jp/ngo/>

E-mail:nbazaro@a2.rimnet.ne.jp

印刷製本：社会福祉法人光友会神奈川ワークショップ

2001年10月 発行

発行責任者：土屋完二

編集スタッフ：太田昌治 魚谷早苗

土屋完二 矢島万知子

高橋純子

編集協力者：他スタッフ一同